

場の理論と日本語の文法現象

- 司会（代表者）岡 智之（東京学芸大学）
- 発表1：岡 智之（東京学芸大学）「場の理論と言語類型論」
- 発表2：新村朋美（フリー）「直示用法の指示詞・人称詞にみる日英の「場認識」の違い」
- 発表3：櫻井千佳子（武蔵野大学）「言語獲得にみられる事態把握と場の言語学」
- 発表4：小柳 昇（東京外国語大学）「存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析—場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか」
- 発表5：大塚正之（早稲田大学）「日本語の文法・談話と場の理論」
- ディスカッサント：中村芳久（金沢大学）

本ワークショップは、場の理論に基づいた言語学の構築を目指し、特に日本語の文法現象が、従来の言語学理論よりも場の理論からうまく説明できることを例証するのを目的とする。

日本語の文法・談話については、欧米の言語とは異なる構造が存在すると指摘されている。また、欧米のポライトネスの考え方では、日本の敬語や待遇表現を理解することはできず、これと異なる「わきまえ」（井出 2006）という考え方が必要であることが明らかにされてきた。その背景には、日本の文化の基底にある「場」を重視する考え方（城戸 2003、清水 2003）があり、その場というものが日本語の文法や談話の構造に大きな影響を与えていると考えられる。場があることにより、状況やコンテキストに依存しなくても、主語を明示しないまま意思疎通に支障がないため、日常的に主語のない談話が交わされる。この場と日本語の文法及び談話との関係性をより具体的、実証的なデータに基づいて解明することによって、場の理論がより具体化され、例証されると考える。

主要参考文献

- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』大修館書店。
- 岡 智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房。
- 城戸雪照（2003）『場所の哲学—存在と場所』文芸社。
- 清水 博（2003）『場の思想』東京大学出版会。

「場の理論と言語類型論」

岡 智之（東京学芸大学）

1. 本発表の目的

本発表では、場の言語学の観点から対格言語と能格言語の類型に関して考察する。能格言語は、出来事中心のナル型言語であることが言われている（池上 1981）。本発表では、能格は、具格あるいは原因格が起源（近藤 2005）であり、それは元来場所性を持ったものである可能性を示す（「風で、扉が開く」）。また、自動詞の分類として「非能格動詞」「非対格動詞」が言われるが、その用語自体、対格言語から見た転倒した用語であり、場所的観点から「能動詞」「所動詞」（三上 1953）という類型を精緻化させることを提案する。

2. 能格言語の位置づけ

(1) a. bama-φ nyina-n.

男・絶対格 座る・過去／現在 「男 座った／座る」

b. bama-nggo warrngo-φ balga-n.

男・能格 女・絶対格 殺す・過去／現在

「男が 女 殺した／殺す」

ワロゴ語（角田 2009:34）

・ 能格言語と対格言語の一般の定義

能格言語…自動詞の動作主と他動詞の被動作主が同型（絶対格）となり、他動詞動作主を別な格（能格）で示すような格組織を有する言語。

対格言語…自動詞の動作主と他動詞の動作主が同じ形態（主格）をとり、他動詞の被動作主が対格となる日本語や英語のような言語。

・ 能格の位置づけと能格言語の定義のとらえ直し

能格構文の能格は他動詞の主語ではなく、主辞的補語にすぎない（『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂、1996：1051）。

池上（1981:229）…能格言語の文型は、＜Aによって、Bが動く＞

「対格型の「言語」では主語として文の中心的な位置を占めうるAの部分は、ここでは出来事の＜起因＞を表す附属的な部分に過ぎない。すでに見たとおり、場所理論的には＜起因＞は＜起点＞的な範疇であり、＜起点＞が一般的に任意的な性格のもの

であることを考えれば、このような〈起点〉の扱いはもともとごく自然なことと言える。」

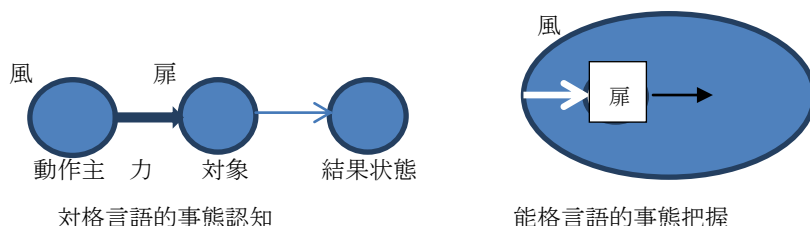
→本発表の立場から言うと、むしろ、能格構文は、〈Aで、Bになる〉というような標示が適当であって、〈Aで〉の部分は、「から」で具現化される〈起点〉というより、「原因」と解釈される「で」ではないかと考える。

(2) a. 風が 扉を ^{ひら}開いた。

主格 対格

b. 風で 扉が ^{ひら}開いた。

具格 主格



英語のような言語は、「動作主が なにかを する」(行為)を中心に事態把握をする(スル型言語)のに対し、日本語は「(場所で) 何かが なる」を中心に物事を捉える傾向にある(ナル型言語)といわれる。つまり、対格言語と能格言語の対立は、スル型とナル型の対立に並行的に捉えられるわけである。対格言語は、主体-客体関係を基軸にして考える言語で、それが格関係では主格と対格に、文法関係では主語と目的語に並行的に表れている。一方、能格言語は、能格はあくまで斜格(動作主を表す補語)であって、対格は存在しない。基軸になるのは、「絶対格+動詞」という出来事である(能格言語では、動詞は能格と一致はせず、絶対格と一致をする)。絶対格は他動構造では客体を表し、自動構造では主体を表すということは、絶対格自体は主体-客体関係には直接関与しないと考えてもいいということになる。つまり、主体-客体関係を基軸に考えていないのであって、能格言語を記述する際に、主語-目的語という文法関係を当てはめることは不適當であると考えられる。ゆえに、「能格性とは、自動詞主語と他動詞目的語が同じ格になり、他動詞主語が能格になる」というような一般的な特徴付けは、ふさわしくないと思われる。そもそも、自動詞、他動詞という分類自体も、他動詞は対格をとり、自動詞は対格をとらないという対格言語で見られる分類基準であって、これを能格言語に当てはめるのも不適當のように思われる。

近藤(2005)では、(2) bの「風で」というような具格が能格の起源であるとしてい

るが、本発表の立場からすると、「風で」は道具というより、原因であり、この原因は「で」のスキーマである場所性を持つものであると思われる。つまり、能格言語の能格は、場所から転じたものである可能性がある。近藤は、能格の具格起源説の根拠として、言語によっては能格と具格とが一体化しているという事実をあげる（カフカーズ諸語）。しかし、一方で能格と属格が一致している言語（エスキモー語など）もあることを考えると、属格と具格を共に能格の起源と考えることもできるだろう。そして、属格と具格の共通性はその場所性にあるということである。

近藤（2005）では、日本語の特殊な主語として、「お茶でいいです。」「私から始めます。」「私としてはそれをしたくない。」などのほかに、所格主語、具格主語の二つをあげ、副詞的要素が主語に転じたものであるとしている。

- (3) その殺人事件は新宿署で捜査している。
- (4) こちらで（当方で、手前どもで）それを処理しておきますよ。
- (5) 施設から町に出た人々で、十三年前「わかば会」を結成した。
- (6) 君とぼくとで『雷同嫌会』というのを拵えないか？
- (7) 私一人で行く。

近藤は(3) (4) は所格主語、(5)～(7)は具格主語の例としている。こうした副詞的要素が生まれた主語が存在するという事実をもって、能格言語において能格が具格に由来するものであるという主張の裏付けにしようとしている。これらは主語論理にたつ近藤の立場からすれば、すべて動作主として主語と解釈できるかもしれないが、本書の立場からは(3)～(7)のデ格要素は動作主的であるが、主語とは言えないと考える。

3. 非対格性の仮説への疑問と自動詞・他動詞類型の再考

関係文法や生成文法では、自動詞にも他動詞にも使われる動詞を能格動詞といい、自動詞の中で能動的な行為を表すものを「非能格動詞」、状態や存在・出現、非意図的行為などを表す動詞を「非対格動詞」と呼んでいる（影山 1996）。「非対格性の仮説」とは、「非対格動詞の主語が統語構造（D構造）において目的語相当として規定される」というものである。たとえば、An accident occurred. という非対格自動詞文は、D構造（深層構造）ではAn accident は目的語位置にあり、これを主語位置に移動させて、形成されるというものである。本発表では、深層構造からの移動というような装置は認めない立場であるから、An accident がもともと目的語位置にあったという仮定はとうてい認められない。「非対格動詞」という呼び名自体が、対格言語を基準にした転倒

した呼び名であり、理解しにくいものである。今回はそのことはおいても、ここで興味深いことは、このようないわゆる「非対格動詞」というのは、意味的に「存在・出現・発生」を意味する動詞で、There 構文に生じるといえるものである。

(8) An accident occurred.

(9) There occurred an accident.

これは、日本語に直訳すれば「そこで、事故が起こった」というものである。これは、「場所で、コトがナル」という事態把握に相当するものである。影山は、これらの「非対格自動詞は、主として状態や位置が変化するもの（対象物）を主語にとる動詞であり、これらの主語は自分の意志で動作するのではなく、自然に何らかの変化を被るもの（いわゆるナル型の表現）を指している」という。この「非対格動詞」の構文は、能格構文であり、ナル型構文なのである。このような観点から「非対格動詞」を位置づけ直してみたい。

日本語の動詞分類では、むしろ三上（1953）のいう、能動詞と所動詞との分類が有効であると思われる。まず、三上は、受身になるかならないかでこの二つを区別しているが、意味的には、能動詞は有情者の意図的行為を表し、所動詞は、「ある、見える、聞こえる、音がする、要る、似合う、できる、飲める」など存在、知覚、必要、可能などの「自然にそうなる」という意味を表す動詞となる。場所論的に重要なのは、この所動詞は、位格を要求するものが多いということである。

(10) 坊やにもう三輪車が要ります。(三上 1953:107)

ただ、所動詞のうち、多くは二格をとるが、「起こる」などの出現系は受身にならないが、二格をとらずデ格をとる。「こわれる」など状態変化を表す自動詞の場合、場所格が表れるとは限らないというようなことはあるが、所動詞は先の「非対格動詞」と共通する部分が多い。

場所論的観点から、言語類型論の成果を継承し、能格性、対格性の問題、また自動詞・他動詞の問題を探求していくことは、今後の大きな課題である。これらの課題を綿密に検討していくことで、「場所の言語学」がより普遍的な言語理論たり得ることが証明されていくと考える。

参考文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。

岡 智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房。

影山太郎（1996）『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版。

近藤健二（2005）『言語類型の起源と系譜』松柏社.

角田太作（2009）『世界の言語と日本語—言語類型論からみた日本語 改訂版』くろしお出版.

二枝美津子（2007）『主語と動詞の諸相—認知文法・類型論的観点から』ひつじ書房.

三上 章（1953=1972）『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版.

言語獲得にみられる事態把握と場の言語学

櫻井千佳子（武蔵野大学）

1. はじめに

日本語と英語の事態把握の違いとして、ナル的な言語とスル的な言語（池上 1981）、「ある言語」と「する言語」（金谷 2004）など、岡（2013）でも指摘されているように、日本語は事態をコトの生成（存在）を基本にして解釈するのに対し、英語は事態を状態が変化するという他動的関係や因果性によって解釈するということが言われている。このような事態把握の相違を、言語獲得研究に照らし合わせて考えると、「異なる言語の話し手は、言語を獲得していくプロセスにおいて、異なる事態把握をするようになるのだろうか」という言語と認知の関係についての問いに答えることができる。

本研究では、同じ出来事を描写している3歳児、5歳児、9歳児の日本語と英語のデータを比較することによって、言語の発達段階における事態把握の傾向を比べる。特に、3歳児のデータに注目することにより、英語でも、必ずしも事態を他動的関係によって解釈しているわけではなく、他動的関係にはこだわらず事態をまるごと成立するものとしてとらえている言い回しが使われていることを示す。さらに、このことが、井出（2006）で言われている日本語の語用論の原理の解明に不可欠な場の要素とどのような関係にあるのかを論じる。

2. Frog Story の研究

本研究のデータは、Berman and Slobin（1994）のFrog Storyの言語獲得研究プロジェクトによるものである。この研究プロジェクトでは、“Frog, where are you?”（Mayer, 1969）という文字のない24枚の絵によって構成されている絵本を被験者に見せて、話の内容について語っているデータを様々な言語で様々な年齢の被験者から収集し、同じ出来事を表現しているナラティブの言語間の比較、また、発達段階を追っての比較を行っている。（絵柄については図を参照）。このSlobinらによる一連の研究では、“thinking for speaking”という言語使用レベルにおける言語相対説を唱えている。これは、子供は獲得する母語の文法的な特徴により、その言語の「発話のための思考」をするようになるという考え方である。

本研究では、状態変化をどのように解釈するのかを日本語と英語で比較するために、他動性の高いシーンについて注目し、そこでは、他動的関係がどのように言語化されているのか、またはされていないのかを、発達段階を追って分析する。

3. 事態における他動的関係の認知と表現

シカが少年と犬を崖から突き落とす、という他動性の高いシーンにおいて、その他動的関係はどのように言語化されているのだろうか。

- (1) Then it turns out they're a deer's antlers, so- and he gets- he lands on his head and he starts running. And he tips him off over a cliff into the water. And he lands. [9;5]
- (2) 男の子はいたずらをしていたのですが、シカを怒らせてしまい、池の中に落ちてしまいました。[9;9]

上記の例のように9歳児のデータでは、英語では、動作主（シカ）、被動作主（少年）が agent と patient という格で示されているものが多くみられ、日本語では、シカを怒らせた結果として少年が池の中に落ちてしまったというような表現がみられている。これは、英語では動作主が被動作主に働きかけることによる状態変化を示す捉え方をしているのに対して、日本語では結果として少年が池の中に落ちていることを捉えていることを考えられる。

このような英語と日本語による相違は、発達段階の早い時期にもみられるのだろうか。

- (3) And this time – male deer got the um – the boy and threw him over a cliff into a pond. [5;10]
- (4) 男の子がシカにのっかっていて、沼におちてしまいました。[5;10]

上記の5歳の被験者のデータは、英語と日本語の同年齢帯のデータの典型的なものである。ここでも、9歳の表現と同様の捉え方の相違がみられる。

さらに、年齢の低いデータでは、下記のように、英語でも日本語でも、シカが男の子と犬を突き落とすという他動的関係が表現されていない。

- (5) A reindeer! And then they all splash into the water. [3;9]
- (6) シカがずっといってて、男の子とわんちゃんがびしょぬれになっています。[3;11]

上記は、英語においても、他動的関係を捉えていることを示す表現が使われていないことを示している。これは、言語獲得の初期段階において、出来事の他動的関係を把握することが認知の中心的な側面であるとする考え方に疑問を呈するものである。つまり、岡（2013）で指摘されているように、言語獲得の初期で出来事に因果関係を見出すべく事態把握することが成立していると考えることに疑問を呈し、出来事の因果関係にはこだわらず事態をまるごと成立するものとしてとらえていることを提案するものである。

4. 事態把握と場の言語学

本研究では、同じ出来事を表現している言語データを日本語と英語で比較することによって、他動的関係が示されているような場面について、それぞれの言語でどのように表現されるのかについて考察をした。9歳児、5歳児の言語データは、英語においては他動的関係が明示されるような言語表現がみられる一方、日本語においては、その出来事の結果に注目し、他動的関係が必ずしも明示されていないことを示した。このことにより、その言語に特徴的にみられるような事態把握が5歳という言語発達段階で獲得されていることを示していると考えられる。さらに、3歳児の言語データは、英語においても、動作主、被動作主について言及することなしに、他動的関係を捉えず、事態をまるごとで成立するものとしてとらえている視点を反映した言い回しが使われていることを示した。

場の言語学では、言語の話し手は場に依存して場の中に存在すると考える。そこでの出来事の捉え方は、その場所で起こった出来事をまるごとで捉えるものである。対して、ある主体が対象に対して働きかけを行い変化を与えるという他動的関係が明示されるような出来事の捉え方は、場から離れて存在する話し手の視点である。このような概念は、場所的捉え方＝日本語の論理、個の捉え方＝英語の論理として、対立するもののように捉えられがちであるが、岡（2013）が指摘するように、場所的思考が基底的で、個の思考がある、と考えることができよう。本研究では、初期の言語獲得のデータをみることによって、言語使用の基底には、日本語においても英語においても、言語の話し手が場の中に入り込み出来事を捉えるという場所的思考がある可能性を論じた。

*本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究代表者：大塚正之）「言語コミュニケーションにおける場の理論の構築:近代社会の問題解決を目指して」（2011年度-2013年度）の交付を受けたものである。

参考文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

井出祥子（2006）『わかまへの語用論』大修館書店

岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房

金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった』講談社

Berman, R. A., & Slobin, D. I. (1994). *Relating events in narrative: A crosslinguistic developmental study*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.

日本語の文法・談話と場の理論

大塚正之（早稲田大学）

1. はじめに

日本語の文法・談話については、欧米の言語とは異なる構造が存在すると指摘されている。また、欧米のポライトネスの考え方では、日本の敬語や礼儀のある表現を理解することはできず、これと異なる「わきまえ」という考え方が必要であることが明らかにされてきた。

その背景には、日本の文化の基底にある「場」を重視する考え方があり、その場というものが日本語の文法や談話の構造に大きな影響を与えていると考えられる。場があることにより、状況やコンテキストに依存しなくても、主語を明示しないまま意思疎通に支障がないため、日常的に主語のない談話が交わされる。この場と日本語の文法及び談話との関係性をより具体的、実証的なデータに基づいて解明したい。

2. 場と状況（情況）・コンテキスト

言語処理の計算モデルを創ろうとした場合、必然的に自然言語の持つ文脈依存性に逢着する。一般に自然言語の多義性というのは、文脈依存性の高さを表現していると考えられる。コンテキストは文脈と訳されることが多いが、多義的であり、例えば、聴き手の注意に重点を置く関連性理論(Relevance Theory)では、コンテキストとは、発話を解釈する際、聴き手がアクセスする想定 (assumption) の集合と定義される。対話の認知プロセスにおいては、広義には発話の行われる環境を指すとされ、発話を取り巻く場面および発話の前後を取り巻く他の発話を意味すると言う（ことばの認知科学事典 305 頁）。また、言語の産出と理解に関する意味づけ論は、「意味は主体の状況内で作られる」とし、状況が意味づけされる以前のもの・ことの集合であるのに対し、情況は、今・ここを生きる主体にとっての意味世界であり、ことばは状況内で意味づけられる事態としてその意味を担うと言う（田中・深谷：1998）。場の言語学は、このような情況・コンテキストという概念を更に拡張し、むしろ、その言語の話し手や聞き手を取り巻く環境をひろく「場」として捉えて、この「場」の方から言語を捉えようとする視点を持っている。

また、言語の発達についてみると、言語には生得的な基盤があるとしても、それが具体的にどのように発現するのかは、その個体が生育する環境に深く依存していることは、言語的環境が欠けていれば言語の習得が困難となり、どのような言語を習得するのは、その個体が生育する言語環境に依存することからも明らかである。この言語発達を可能とするような環境を広く「場」と考えて、どのような場がどのような言

語の発達を可能とし、また促進するのかを考える視点を持つのが場の言語学である。

3 場と日本語の文法

中村雄二郎（『西田幾多郎Ⅱ』：2001）は、時枝誠記の言語過程説における客体的表現（詞）と主体的表現（辞）との結びつきにおける〈場面〉の考え方を西田幾多郎の場所の論理と関係づけて、日本語の統語論には次のような特徴があると指摘している。①日本語では、その全体が幾重にも最後に来る辞（主体的表現）によって包まれるから、主観性を帯びた感情的な文が常態となること、②文は、辞によって語る主体と繋がり、主体のいる場面と繋がり、この場面の拘束が大きいこと、③日本語の文は、辞+詞という主客の融合を重層的に含んでいるので、体験的なことばを深めるのに都合がよいが、客観的、概念的の世界を構築するのには不都合であること、④日本語の文では、詞+辞の結びつきからなる構造によって、真の主体は、辞の働きとしてだけ見出されるから、文法上での形式的な主語の存在はあまり重要ではないこと（同書 52 頁以下）である。このように日本語は主観性が高いということは、熊倉千之『日本語の深層』（2011）でも指摘されている。

他方、池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』（1981）では、英語と日本語とを比較したとき、いくつかのかなり際立った対立的な特徴を見てとることができるし、次のように指摘されている。すなわち、英語では、基本的な運動の動詞が〈場所の変化〉を指す場合から〈常態の変化〉を表すのによく転用される。他方、日本語では、〈状態の変化〉を表す動詞が〈場所の変化〉を表すのに転用されるとし、その原因を、英語の場合は、個体中心的な捉え方が本来そうでない分野に拡大されており、日本語の場合は、できごと全体として捉える見方が拡大適用されているとし、これを、〈モノ〉と〈コト〉に対比させる。そこから、個体＝モノが何かをするという視点と全体＝コトが何かになるという視点が導かれ、「する」と「なる」の言語学が導かれる。そして、この「なる」は、主体のない世界、無我の世界やウォーフが描くホーピ族の世界へと連なっていく。そこには動詞を場の変化として捉える視点がある。

古来、ヒトは、個人的主体としては自らを意識していなかったのであり、仏教は古くから主体などないと言い続けている。プラトンないしプラトン主義も実在するのはアイデアであり、個物的実体ではないと主張し続けている。近代的な自我が意識され始めたのは、遑っても 1 2、3 世紀であり、はっきりとした近代的自我が誕生したのは、更に後のことであり、それまでは主体が何かをするというよりも、何か起きるというのが動詞の本来の作用であったと考えられる。場の中での動きを表現するのが動詞であり、動かない何かを表現するのが名詞であり、それは場を規定する 2 つのモメン

トであったと考えられる。そこは、誰かが何かをするというよりも、その場において何か動くという世界である。そのため、文字を持たない民族を始め、古代の民族は、場の中で、常に変化する世界を覗いていたのであり、この全体の動く状態が日本語の「コト」であり、このできごとの中で、動かない対象を「モノ」として理解していたと考えられる。日本語は、その名残を今もとどめている言語の1つであると位置づけられる。そのような言語は、日本語だけではなく、カフカス地方やアメリカ・インディアンやマヤの部族の間にも見出すことができるのではないと思われる。動きというのは、場の変化であり、誰かが何かをするという観念では捉えられない。誰かが何かをするという観念が生まれて、言語は対格化して行ったものと推測される。つまり、時枝の言語過程説の考え方も、池上の「なる」の考え方も、その背景には、動詞を場の変化として捉える視点が含まれており、この場の変化を主体が表現しようとして生まれたのが言語であると考えられる。それは、ヒトが今、ここで起きている現象を捉えて、シンボル化したものであるから、自ずから主観的になるし、誰かが何かをするという視点を欠いたものになる。

3 日本語の談話と場の理論

談話（ディスコース）は、複数人のことばの交換を前提としており、最も場の制約が出やすい場面である。常に相手の存在を前提として、言葉を語るとき、場における主観性が表れやすいものとなる。場においては、言語は客観的事実を叙述するものではなく、主観の表現であるから、談話の相手との関係性がまず先に存在している。場における談話者相互の関係性が言語表現に影響を与えることになる。その最も典型的な表現方法が敬語である。場においては、談話の相手が内部の人間か外部の人間か、目上の人間か、同輩か、目下の人間かによって、使うことができる言葉の範囲が決まっている。目下の人間に使ってよい表現を目上の人間に使うと、言葉の使い方を誤っていると指摘される。これは文法における規則ではなく、世間＝閉じられた社会のルール＝規則である。これを場のルールと言ってもよい。日本語は、場の中で語られるので、文法上の制約だけではなく、場のルールの制約を受ける。いくら文法的に正しい言語を話しても、場のルールに反していれば、その言語表現は誤っていると評価されるのである。それを無視して使用すると、意味は通じるが、世間の壁にぶち当たることになる。この場のルールを知らないことを世間知らずと言う。

4 場の理論と言語

そこで、改めて場の理論から観た言語の特徴を整理すると、古代からヒトは場の

中で生活をしており、場の中で言語を育んできたと考えられる。場の中では、これを冷静に外から見る第三者はおらず、誰もが場の中であって、場の変化を感じ取り、これを言語で表現したものと考えられる。そのため、主体が何かをするというのではなく、場が変化するという現象を主観的に言葉に表現してきたのである。場という社会的関係性がまず存在しており、その社会的な場の中で言語は生成されていったと考えられる。そこから、日本語には、談話について述べたような制約が場に課せられるとともに、これまでに各研究者によって発表されたような性質が色濃く残っているのである。各研究者の発表した内容を場の視点から整理をすると、次のように表現することができる。

第1に、動詞とは場の変化を表現するものである。現代のことばで「AがBを殺した」という事態は、場の内部からみると、「Bが死んだ」という場の変化が中心となる事態である。この事態を引き起こしたと考えられるのがAであるとすると、「AによってBが死んだ」と表現されることになる。動詞を主体の行為としてではなく、場の変化として捉える視点から考えると、当然の結果である。おそらく古代社会においては、どの民族も、場の変化を表現するため、その変化を動詞で捉え、変化しないものを名詞で捉えたと考えられる。したがって、「AによってBが死んだ」という能格言語に特有の表現は、人類が言語を習得し始めた当初は、どの民族にも共通のことであったと考えられるのである。何故なら、その昔は、行為主体というものはなく、みなそれぞれの場の中で生活をしていた。古代ギリシャを例にとれば、コロス（合唱隊）だけで、ヒーローはいなかったのである。

第2に、場においてはお互いの関係性がまず存在する。その関係性の背後に主体があると考えられる。したがって、関係性の中で言葉が生まれる。妻や夫は、子どもが生まれると、母や父になり、その親はじじ、ばばになる。生まれた子は、下の子が生まれると、ぼくからお兄ちゃんになる。ぼくは成長すると俺になり、会社の中では私になる。主体がまずあるのではなく、社会という場の関係性がまず存在するのであり、そこから、主体を表現する言語も生まれて来るので、僕、俺、私、君、貴方、貴殿と人称表現も多様になる。なぜなら、言葉は場の関係性の中で生成されるものであるから、社会関係が変化すれば、自己を表現する言葉も当然に変化をしていくのである。場の中では、自我というものがまず存在するわけではないから、関係性の中で言語表現は決定されるのである。「の」というのも本来、関係性を示す格助詞であったと考えられる。私の兄、あなたの会社は明らかに関係性であるが、これは更に所有へと拡張され、「私の子です」「俺の女だ」など、本来関係性であるものが所有性を帯びて使用される

場合も生まれて来る。

第 3 に、場においては、主体が変化を感じてことばで表現するのであるから、事態の主観的把握がことばになる。そして場の働きが弱まるにつれて、次第に客観的な事態把握ができるようになっていく。そのため、場が弱く、客観的把握の強い言語社会においても、乳幼児期の言語の獲得段階においては、主観的な把握が中心となるのである。何故なら、乳幼児期においては、母子相互作用の場の中に存在しているのであり、母子関係から自他の分離が進むに連れて、その社会に適合する言語を習得していくからである。

第 4 に、場においては、ことばは場の変化や場の状態を表現する。場の内部において、どの場がどのようになったのか、どのようにになっているのかを観たままに表現するのが本来の言葉の使い方である。場においては、ある場所で何かが起きるのである。この「ある場所」というのは、ヒトなどの主体の場合でも同じである。「桃の木が実を結ぶ」という場合、「桃の木」は主語ではなく、桃の木という場所において実を結ぶという変化が生じているという事態を見たとおりに報告する事態把握である。したがって、「桃の木に実が結ぶ」と表現することもできる。場の状態の表現の仕方なので、どちらの表現も可能なのである。また、「象は鼻が長い」という場合、「象」は、主語ではなく、象という場所に於いて鼻が長いという状態が存在しているという事態把握であると考えられる。場においては、ある場所で何かが起きるのである。

(以上)